小説

井上次雄
杉山啓志　選

入選

シーズ・ア・レインボー

野瀬町
水沢　郁

「モンテロー」と聞こえた。もう一度お願いした。

「モンテロー」、ケイトさんはゆっくり繰り返した。迂闊だった。それがカナダの、あの大都市のことだと、すぐには思いつかなかった。

「ああ、モントリオールね」

ケイトさんは微笑んだ。

もうすぐ七浜（ななはま）駅に着く。わたしは頭の中をくるくる探しまわり、別れの挨拶を引っ張り出す。「シーユー、ネクストマンデイ」

「月曜日はお休みです。ホリデイ」

「あ、ああ。日曜と祝日がかさなるからでしたね」

そんなややこしい言い方をして何かを取り返そうとしなくてもいいのに、そう思った頃には、わずかな降客がすり抜けるのを待ちかねたように、どっと車内に乗客がなだれ込んでくる。

ケイトさんは軽く会釈すると、悠然と人波を漕いでいく。風をはらんだ帆みたいだ。

突如、ローリングストーンズの「シーズ・ア・レインボー」がわたしの脳内に聞こえてきた。ケイトさんはオーラを放ちながらホームを歩いていく。

次の次の月曜日が待ち遠しかった。

＊

二学期からで申し訳ないが、江北（こうほく）高校に非常勤講師で来ていただけないか、いや来てくれないと困るのだと頼み込んできたのは教頭からだった。大昔、江北高校の同僚だった。前期高齢者のわたしに、しかも年度途中からの要請とは、よほどの事態が生じたに違いない。そう思って、二日後にオーケーの電話を入れた。再雇用も終えてアルコール中毒が一段とひどくなったが、アリジゴクに捕まる寸前に依存症から這い上がって一年近くになる。週三回、計六時間ぐらいなら大丈夫だ。車は土日以外やめている。

勤務を始めて十日ほど経った頃、昼休みに職員室の端のほうでデスクに突っ伏している外国人の姿を見かけた。東洋系ではなさそうだ。きっと英語のＡＬＴ（外国語指導助手）に違いない。

わたしは、五時間目の授業を終え、次にやって来る日の授業の下準備と後片付けを済ませて帰るつもりだった。ここにいてもすることがない。かといって電車は朝夕を除き、一時間に一本だった。

昔言っていた「三時汽車」に乗るしかない。まだ四〇分もある。だから前週の勤務日からしているように、北国街道沿いの古い家並みをぶらぶら眺め歩き、駅構内にあるファーマーズマーケットみたいな売店にたどり着くと、野菜や果物や土産物を冷やかし、レジにあるコーヒーメーカーでコーヒーをいれてもらうということになる。

そうして早めにプラットホームで電車を待っていたときである。電車到着の二三分前に職員室で見かけたＡＬＴがやってきた。

さっきはいいかげんに一瞥しただけだったからよく分からなかったが、若い娘だった。ホームに人はほとんどいない。わたしは声をかけた。

「アーユーＡＬＴ？」

「はい、そうです」

職員室の講師席の隣には共用パソコンがあり、先週「けいと」と、前のユーザー名が表示されていて、いったいなんのことなのだろうと思っていたが、これで納得できた。

やって来た四両編成の電車に乗り込んで、それから互いの英語力と日本語力でレゴブロックを組み立てていくように会話した。彼女は気さくで鷹揚だった。

カナダから日本に来て二年目を迎えるＡＬＴだと言った。わたしはリタイア組なのだが、この学校で週三回国語を教えることになったのだと言った。彼女は、本務は姉川高校で、江北高校勤務は月曜日だけなのだと言った。

赤月駅に着いた。ここも乗り込む人はほとんどない。それは次の川俣駅でも同じことだろう。秋の観光シーズンにはまだ早い頃だったし、下校時間や退勤時間でもない。

「ジャパンイズベリーヒューミッド（日本はとてもむし暑いです）」

知っている単語をむりやり使って言った。

「イエース」彼女は同意し、カナダはこの時期はもう涼しくて冬はとても寒いと言ったようだ。

姉川駅に着いた。ホーム上にちらほらと高校生の姿がある。授業を終え、ダッシュで駅に駆けつければ間に合う時間だ。「あしたはこの学校ですね」窓の外を見ながら言ったら「はいそうです」とケイトさんは言った。

来週以降も機会があればまた会えるのだが、次は七浜だ。この地域の中心都市である。

「わたしは佐和で降りますが、あなたはどこで降りますか」

「ナナハマです」

「次ですね」

自分から話しかけておきながら、ずっと車中の隣り合わせでいるのも、気まずい思いをすることもあるかもしれない、相手は若い女性だ、言葉に行き詰まって沈黙が支配するのもいやだなと思い始めていたので、ちょっと安心した。十五分というのは、ほんとにほどよい時間だ。また聞いてしまった。

「カナダのどこ出身ですか」

＊

モントリオールまでは、成田から十五時間かかる、ものすごい苦痛である、だから日本に来て以来、国には帰っていないと、次の次の月曜日、ケイトさんは言った。

「以前、オリンピックが開かれましたよね」

ケイトさんは返答に窮したのか、何か言ったのか、よく分からなかった。確か、東京、メキシコシティー、ミュンヘン、モントリオールの順のはずだったとあわてて計算したが、当然ケイトさんの生まれるずっと前の話だ。

「ネクストイヤー、東京でオリンピックがあります」と今度は自分の話題につじつまを合わせるつもりで言って、「ラグビーのカナダチームは、台風被害に遭った東北で復興支援のボランティア活動をしてくれました。知っていますか」

「わたしは知りません」、英語で返ってきた。

そうか、あんまり興味ないのだなと、わたしは「日本はタイフーンや地震など自然災害が多いのですよ。カナダはどうですか」

ケイトさんはうなずいて、ちょっと考えて「地震やハリケーンはありませんが、冬はブリザードのときがあります」と言った。

そうこうしているうちに、電車は七浜駅にすべりこんでいく。

「シーユーネクストマンデー」

ケイトさんはにっこり笑った。ディープ波ヘアスタイルを揺らめかせながらプラットホームに足を踏み出す。「シーズ・ア・レインボー」のメロディーが駅構内に舞い下り

て、ケイトさんの七色があたりに振りまかれる。

＊

日曜日に久し振りにきつい山歩きをしたせいか、朝から耳鳴りとめまいがひどく、這いつくばるようにしないと立ち上がれなかった。上半身をぐるぐる引き回され、まっすぐに歩けなかった。

三十年前の一時期悩まされたメニエール病が、長い休眠から覚めてむっくり起きあがってきたのだと思った。症状をなだめなだめ、とにかく物につかまりながら仕事に出向いた。授業中は連獅子の毛振りのありさまで、教壇で足を踏みはずし、前の女生徒にもたれかかったりした。生徒たちは何が起こっているのか分かっていないようだった。誰も声を上げず固まっていた。

ひと仕事終えると、メニエール氏も引き上げていったようで、うそのように治った。

例の、道の駅みたいなショップに立ち寄った。

樋ノ本（ひのもと）駅は特急「あおさぎ」がびゅんびゅん飛ばしていく通過駅だが、地元の観光振興の願いが込められた駅だ。電車の待ち時間はたっぷりあるから、観音めぐりや古戦場散策、鏡湖（かがみこ）ハイクのあと、ここで十分吟味して旅の土産物選びができる。

この日は、早生ミカンを買う。相場は知らないが、安いと思った。ポリ袋に小粒なのがぎっしり詰まっている。

いつものようにわたしは職場をずっと前に出ていて、いつものプラットホームのベンチで彼女を待ち受けた。

わたしはまるで逢い引き気分だが、ケイトさんは月曜は七時半に出勤して、五限までずっと授業で空き時間がないのだと言っていた。彼女にとってはブルーマンデーのお疲れ時に、余計な精神的負担になっていないだろうか、イヤイヤなのではなかろうか、などとわたしも気疲れしている。待ち人というものは、現れても現れなくてもあまり心臓によくないものだという、若気の熾（お）き火（び）がぽっと灯ったような気分だ。

今日は来ないのかな、誰かに車に乗せてもらったのかな、仕事があって居残りかなとあきらめかけた頃、ケイトさんらしき人影が階段を下りて来た。すうっと背後を回り、黒っぽいジャケットがしとやかにわたしの横に腰を下ろした。

「きょうの装い、シックですね。よく似合っていますよ。美しいです」

言ってから、美しいはいいとしても、シックは病気の意味に取られないかと焦った。ケイトさんは「アハン」と笑ったような気がした。わたしはポリ袋からミカンを一つ取り出し、「食べませんか」

ケイトさんは「ありがとうございます」と言って、小器用に皮を剥くと、むしゃむしゃ食べ始めた。つられるようにわたしも一つ食べた。

電車が割り込んできた。ケイトさんはミカンの皮をひょいと目の前のゴミ箱に入れた。わたしも放り込んだ。

電車が動き出し、土日はどう過ごしたのかと聞いた。

「妹が日本に来ています」

ＩＴ企業でシステムエンジニアをしているのだが、休みを取ってケイトさんのところに遊びに来ているのだそうだ。大阪や京都に連れて行き、三条通りをぶらぶら歩き、道頓堀でたこ焼きを食べたと言った。

電車は「日本の夕陽百選 ― 江北水鳥公園」と大書された看板に招かれるように、川俣駅に止まった。わたしたちの車両に乗り込む人はいなかった。

「妹さんはいつまでいますか」

「今度はアキハバラに行くと言っています」

わたしはケイトさんに向き直って、「リアリー？」と問い返した。

秋葉原はメイドカフェやアニメや電化製品の町ではないのか。若者の、なんだか浮わつ

いたノリでごった返している町。
「それはちょっとミーハーですね」
「ミーハーってなんですか」
「……流行をキャッキャッ喜ぶみたいな」
　言ってからしまったと思った。遅かった。
「ミーハー」はすでにケイトさんの脳内に到達している。ミーハーの身柄を直ちに拘束して、シュレッダーにかけてしまいたかったがどうしようもない。
「彼女はゲームが好きなのです」
　ケイトさんはそう言ったきり、特別の反応も示さなかったので、すぐに話題を切り替えた。七浜に着くまでになんとかしなければ。しかし蒸し返すわけにはいかない。信頼関係や人間的なつながりもないのに、言い訳や真意が伝わるわけがない。
　どうしてわたしはこうなんだろう、よく考えもしないで、思ったことをそのまま口に出してしまうところがある。妹さんの尊厳を傷つけたことにならないか。これを機に、ケイトさんから検索の履歴を消すように嫌われてしまうのではないか。ケイトさんから教育委員会に抗議の電話があり、次の勤務日に、あのかつての同僚から「言いにくいのですが……」とクビを宣告されることにならないか。この軽率な失言が国際問題に発展しないとも限らない。
　七浜駅でケイトさんが降車しても、ローリングストーンズは鳴りを潜めたままだった。
　わたしはその日、二ヶ月ぶりに缶ビールを口にした。つくづく自分はだめな人間だと思った。軽く神経を麻痺させてから、あらためてミーハーの意味や使用例をネットで調べてみた。分かってはいたが、かんばしくなかった。
　次の月曜は二週間後だった。わたしはその半月ほどのあいだミーハーに悩まされ続けた。ケイトさんの来ない木曜金曜にも、職場や身辺に何か異変はないか、ミーハーの事なきを祈らないではいられなかった。

＊

　月曜日がやってきた。職員室の座席配置を新幹線車内で言えば、四列ほど斜め前にいるケイトさんの背後をちらちら見やっていた。五時間目が終わってしばらくすると、もう帰ろうかとケイトさんがアイコンタクトを取ったように思えた。わたしはいそいそと帰り支度をした。
　二人並んで校門を出た。何か切り出されるのではないかとドキドキしていた。「わたしは貴女に謝罪せねばならない」という英文を念入りに準備していたのだが、ケイトさんは、その隙を与えないかのように足取り軽く、さっささっさと歩いていく。あっという間に駅に着いた。
　ずいぶん涼しくなっていた。わたしは時候のことなどを、もにょもにょ言ってから、おそるおそる切り出した。
「妹さんは秋葉原を楽しんできましたか」
「秋葉原はやめて韓国に行ってました」
　秋葉原の話題の拍子は抜けたが、わたしはとにかく行き過ぎた言動の謝罪をせねばならない。早口で「この前、妹さんのことを、流行を追いかけるだけの女の子みたいに言ってごめんなさいね」
「ハア?」、日本の若い女の子なら言うだろう。だがケイトさんは深い思念の表情で、「ソウルでいっぱいおみやげ買ってきました」とわたしを見た。
「ソウルのどこに行かれましたか」ソウルには何度か行ったことがある。
「トンデムン(東大門)です」
「あそこは衣料品のたくさんある市場(シジャン)ですね。わたしは韓国語、少ししゃべれます」
　初めて韓国に行ったとき、プサンの地下街で声をかけられた男に、これ以下の場末はあるまいと思われるような飲み屋に連れて行かれ、しこたま飲んだ。店外の共同トイレで用を足して帰ってくると、その男、パクさんは「あれは日本の乞食かと店の人に聞かれましたよ」とからから笑った。そんなところに日

本人は行かないからだった。別れてから宿にはたどり着けたが、深夜の地下鉄線路にゲロを吐いた。

パクさんはいまだにクリスマスカードと新年のメールを寄越してくれる。

「……わたしも韓国語、できるのですよ」ケイトさんが思いだしたように言った。

もしかしたら、ほんとは日本語もペラペラなのを隠しているのかもしれない。

ケベック州出身のケイトさんは、家庭内ではフランス語の方が多いと、この前言っていたはずだ。おそるべきマルチ言語ぶりだ。

「買ったのは、夏服ですか、それとも冬服ですか」

「両方、スーツケースいっぱい買ってきました。お店開けます。それに……」

ケイトさんのダークブラウンの虹彩が濡れたようにキラキラ光った。瞳に吸い込まれそうになる。

「いい出会いがあったそうです」

「誰と」

「わたしにも言ってくれませんでした」

「秘密の?」

「はい、トップシークレット」、ケイトさんは、唇と人差し指で小さな十字架を作った。

「謎の邂逅ですね」

「カイコウ?」

漢語や慣用的な言い回しをレクチャーするつもりはないのだが、ケイトさんはわたしにとって魅惑的なギフチョウだ。やはり構えてしまう。

「偶然の出会いのことです」

――ブラジル国籍の野中アマンダさんは、前期期末考査の答案にスマホの文字変換機能を使って、「邂逅」を書いた。

試験中はスマホの使用禁止だと何度注意してもバッグにしまわない。まだ触るなら、零点の上、キンシンになりますよと何回目かの机間巡視でそっと注意したら、ふてくされてスマホを隣の机の上に放り投げた。再雇用の四年目、夜間定時制高校勤務のときだった。

試験後、十数枚ほどの答案用紙の中から、最初に採点してみたら「カイコウ一番(いちばん)」という書き取り問題に、針金細工のような「邂逅」の文字を書いていた。テストは難しいものだ、テストに出すくらいだから漢字は難しいものだろうとの思いが、その熟語を選ばせたのだろう。

アマンダさんは、頭の回転と日本語の会話能力(特に関西弁)は超一流だったが、文章を読む力は二流半、漢字を書く能力は漢検六級程度だった。

球技大会の卓球で「ジジイ、カクゴしろ」と言ってムキになってサーブを入れ、わたしは「黙れ、ションベン垂れ」とラリーに応じた。いつも五時前になると、女友だちと職員室になだれこんできて、とぐろを巻いていた。友人に「先生、アマンダな、めっちゃ真剣な目ェでママチャリこいで、宇佐津(うさつ)へバイトに行っきょるんやでえ。一時間かかるんやで。こいつ見かけたとき、ワロタわ」などとからかわれていた。

わたしは年末年始にかけて、管理職から次年度はどうするのかと聞かれていたが、依存症がひどくなり、昼過ぎになっても酒を手放せない状態になっていたので、もう迷惑はかけられないとそれきり仕事をやめたのだが、アマンダさんは、三月に、籍を置いたまま学校に来なくなったと聞いた。

もう二年が経つ。

どこで何をしているのか、もう一度顔を見たくて、会いたくてしかたがない。悪い男に騙されて、稼いだ金を貢がせられたりしていないかと、ことあるごとに心を砕く。

あの頃、わたしは弱り切っていた。母は老病に壊れ、妻の長年溜まっていた堰(せき)が切れ、娘はわたしをけむたがって孫も近寄らせず、息子はカタツムリになって久しかった。

アマンダさん、わたしはあなたの破天荒ぶりにずいぶん救われていたのですよ。邂逅一番。あなたのは、正解だった――

電車が姉川駅に近づくと、後方に退いていく御前山が長い裾を引いて去り、それまで隠していた白猪山の全容を露わにしていく。前座の踊り子が徐々に客の興奮を盛り上げて出番を終えると、満を持して真打ちの人気ダンサーが登場するみたいだ……

……右横に座っているケイトさんの身体がわずかに動く気配がする。「シーユー」ケイトさんは黒板の誤字を消すみたいに手のひらを振った。

ローリングストーンズは出番をためらっていた。

＊

十一月も中旬になった。

樋ノ本あたりは晩秋から初冬にかけてしぐれが多い。だから遅い朝と昼下がりの行き帰りにも虹を見かけることがよくある。

その日は、マラソンゲートにあるようなアーチの、とんでもなく巨大なやつが白猪山と張り合っていた。

「わたしの母はバンクーバーで生まれました。三歳のときに日本に帰ってきました。祖父母が出稼ぎでカナダに行っていたのです」

カナダに関する話題を、今頃もう一つ思い出したのだ。世界恐慌に見舞われて、と言おうとしたがやめた。「出稼ぎ」はそのまま使った。なんとか分かってもらえるだろう。

彼女は黙って聞いていた。

「クリスマスやお正月にはカナダに帰りますか」

「考え中、です」

「やっぱり長いフライトがいやですか」

「来年の七月までですから」契約切れか更新のことなのだろう、「それからモンテローに帰ります。……でも、クリスマスにサプライズで帰るかもしれません」

ケイトさんは、いつもわたしたちの座る反対側の、通路を隔てたみずうみ側の外を眺めていた。

しばらくして「わたしもソウルに行ってきました」と振り返って笑った。「トンデムンやミョンドン（明洞）に行って、いろんなものいっぱい食べて、いっぱいショッピングしました。アクセサリーやクロウズ」

聞いていて思わず笑みがこぼれた。予想外だった。しっかり、ちゃっかりしている。県下の高校生の体育・文化の総合大会や土日で、二人とも勤務を必要としない日が長く続くときがあった。

「ひとりで？何泊」

「はい、三日間、いました」

「元気ですね」

「でも、風邪を引きました。今は喉が痛いです。あなたはどこに行きましたか」

連続しての休みにどこにも行かなかった、いや、行けなかった人もいる。わたしはどこにも行かなかった。聞く場合は「どこに」より、「どこか行きましたか」のほうがいいと思ったが、もちろんケイトさんにはぶしつけな気持ちなどないし、その言い方に少しの違和感を覚えるということは、行動力の面でわたしに少しひがみがあるということだ。

「神戸の、六甲山に行ってきました。トゥエンティクロスというところ」

「トゥエンティクロス？」

「谷川沿いに山を歩きます。何回も何回も、同じ川を右に左に横切ってのぼっていくので、トゥエンティクロスと言います」

わたしは嘘をついた。一度そこに行ってみなければならないと思っているが、まだ果たせていない。いつかいつかと思いながら、また行かなかった。

「誰と行きましたか」

大学時代の友人は故郷の神戸にもどって輸入雑貨の仕事をしていたが、つい先年、急死した。

「ひとりで行きました」

ある日、長らく途絶えていたEメールが入っていて、妹さんからその死を知らされた。パソコンのパスワードが分からなくて、専門の業者に依頼したが開けるのにずいぶん

手間取り連絡が遅れた、葬儀は身内で行い、遺品整理はこのメールが最後になった、これまでの厚誼を感謝するということが、簡潔にしたためられてあった。彼は独り身だった。

死の一週間前に六甲の山歩きをしたらしく、そのときに自撮りした写真が添えられていた。手帳の山行記録によれば、そこはトゥエンティクロスから森林植物園に向かうところだということだった。彼の感慨めいたメモも写真ファイルで添付されていた。

― 裾濡らす時もある／ひとわたりひとわたり／二十渉／降り注ぐ雨は人を選ばない／陽光がそうであるように

彼の人柄が現れた端正な筆跡だった。身びいきになりますが、兄の人生そのままの言葉だと思います。妹さんはメールの最後をそう結んでいた。

＊

ケイトさんが共用パソコン席にやって来て「今日は帰れない」と言った。

期末考査の問題作成か何かの業務だろうと察した。わたしは試験初日の二限に終わったばかりのテストを採点していた。だから、電車の時間とのせめぎ合いの最中だった。

試験が終われば特別時間割となり行事も多くなるので、ケイトさんとは、おそらく一月のなかばまで会えないだろう。

「風邪は治りましたか」横目で言ったら、「はい、とっくに」とケイトさんは画面から目を離して言った。

「よかったですね」わたしも向き直り、自然に言った「さびしいですが、わたしはもうじき帰ります」

樋ノ本駅のプラットホームには、珍しく五六人の少年たちがたむろしていた。

これから七浜や佐和にあるショッピングモールに繰り出すのだろう。もう赤やシルバーの派手な色のダウンジャケットをはおっていて、点字ブロックのあたりで車座になって座りこんでいる。別のところには、昼前に下校した制服姿の江北高校生もいる。

わたしは少し迷ったが、やはりいつもの先頭車両の乗降位置マークのところに行こうと思った。そのためにはヤンキーふうの若者たちの前を通らなければならなかったが、ホーム幅はベンチのあるところから前方はかなり狭くなる。しかし、こんなことで大切な習慣は変えたくなかった。

リーダー格と思われる大柄な少年が線路際に立っていた。わたしは彼に向かって進み、無理のない体勢を意識しながらすり抜けた。

背後から不穏な雰囲気が忍び寄る。電車が接近する音が聞こえてきた。カーンという鋭い音が聞こえた。振り返った。十メートルほど後方だった。あの少年が線路に何かのアルミ缶を蹴り込んでいた。

電車がわたしの少し前で静かに停止する直前、運転士を確認した。若い女性だった。きっと前方を見つめたままだった。電車は数少ない客を吐き、普段より多めの乗客を吸い込んだ。車内の動きは何もなかった、アナウンスもない。

電車はそのまま発車した。わたしは自分の誘発を悔いた。

＊

試験後の特別時間割表を見ていて、今年最後の月曜日の授業に、二年生の英会話の授業があり、ひょっとしてひょっとするかもしれないと思った。

正月も近いことだし、南佐和の複合型商業施設の中にある理美容店に行った。ここは女性従業員ばかりの、いわゆる千円カットの店だ。

千円で指名までできるとは恐れ多い。そんなこと考えたことはなかった。ずっと通い続けているが、ひと月に一度、誰かに髪を短くスッキリしてもらえればそれで十分だった。

だが、三ヶ月前にやしきさんというお気に入りができた。

やしきさんを好きになったのは、作業に取りかかってしばらくして、誤って床に落とし

た鋏には目もくれず、ガンマンのごとく腰からすぐ別の鋏を取り出し、そのまま調髪を続けたからだった。とてもいさぎよい気がした。

それでもわたしは、背後や横を振り子のようにせわしく行き来するやしきさんが、落とした鋏をいつ拾うのか、やしきさんの足が大事な鋏を踏んづけたりしないかと気になってしかたなかった。やしきさんはずぼらな人なのかもしれないと思ったりもしたが、そのうち、わたしのせいのような気もしてきた。

やしきさんは、わたしの頭に向かって、ありがとうございました、と言った。今度は誰かに続いて、いらっしゃいませ、と小声でわたしに言った。また、ありがとうございました、とわたしの耳のあたりでささやいた。そのたびに、店の入り口でカランと音がする。出入りする人にはやしきさんの声は気配としてしか伝わっていないだろう。

やしきさんは第一発声者に続いて、声を出していたようだ。それは客商売のイロハだろうけれど、やしきさんのは、愛想でも義務でもない、手抜きでもなかった。

二十円のお釣りとレシートをもらうとき、鋏をなぜ拾わなかったのか理由をたずねた。

「お急ぎかと思いましたので」

わたしは順番を待っていた人はほとんどいなかったのに、と思った。十秒も違わないだろうにと思った。

「今度は指名します。あなたにしてもらって、癒されました」と、名札の「やしき」を見ながら言った。

「ありがとうございます。でも、あまりこの店には来ないんですよ。今日はヘルプで」

やしきさんは、びっくりしたような顔をした。レジの後ろにあるホワイトボードの顔写真と勤務予定を見たら、やしきさんは、七浜店、アシスタントとあった。

やしきさんとは今のところこの一回だけで、会えないでいる。

この日は、あしださんだった。その日の勤務は四人で、あしださんは、順番を待っていたときにホワイトボードで十三時まで勤務の人だと知った。あしださんが客をひとりさばき終えた。十三時を過ぎていたのに、横で女の人の髪を整えている店長らしき人に何か耳打ちすると、わたしの番号を呼んだ。「いいんですか。一時までとありましたが」

あしださんは笑顔で席を勧めた。

年格好から、やしきさんと同じように、小学生くらいの子を持っている人なのだろうと思った。やしきさんと同じように、女性客相手の場合でも、子どもや近所のことを持ちだして、ああだこうだと話を合わせるタイプの人ではないのだろうと思った。

やしきさんに会いたいと思った。

＊

ケイトさんは来ていなかった。思い通りに事が運ぶわけはないなと、とりたてて落胆もしなかった。普通のことだと思った。

その日は授業がひとコマだけだった。期末考査後の最初の授業だったし、それまでの教材が太宰治の『富嶽百景』だったので、同じ時期の、太宰の別の短編小説を朗読して聞かせた。精神も私生活も比較的安定している頃の、つつましく好もしい佳品だ。

授業終了前に、正教員から指示を受けていた冬休みの課題を配布する。渡し終えると、わたしオリジナルの課題のためにＡ５版の小さな紙も配った。

課題は「富士には月見草がよく似合う。」という、あの有名な文句の各自版作りだ。一種のパロディーになってしまうかもしれないが、「富士」には圧倒的な存在感を持つ、できれば自然界のものを、「月見草」には一見ちっぽけに思えるものを、この二つを差し替え、それら二つが互いに張り合うような関係になること、この三点を強調して、「では、みなさん、よいお年を」と職員室に引きあげてきた。

帰りの電車に乗り込んでから、早すぎるかもしれないが、この前のときケイトさんにも

言っておきたかったなと思った。クリスマスにカナダに帰るなら、なおさらだ。

ケイトさんとは今後、一月二月の六七回、十五分間の会話を楽しめるだろう。

三月なかば、わたしは再び江北の地に足を運ぶことはなくなるだろう。それからまた、日々初めての土地に足を踏み入れるような生活が続いていくのだろう。

八月、ケイトさんは故郷に帰っていずれ仕事に就くだろう。

ケイトさんは大学で教育学を専攻したが、教員はもうやめて、帰国後は聴覚障害の人を支援する仕事をしたいと言っていた。特殊な職種のように思えて、その理由を聞きたい気もしたが、聞かなかった。わたしとのやりとりの中で、ナースやメディカルという単語も出てきたが、よく分からなかった。

モントリオール近郊の山々が、思い思いに弾け飛んだ絵の具のように紅葉する頃、ケイトさんは江北の地のこと、七浜での生活のことを思い出したりすることがあるのだろうか。

ケイトさんには、きっとカナダの霧にきらめく後光がさすことだろう。

右わき腹を大きくえぐられた白猪山が、いつものようにあぐらをかいて座し、冬の陽を浴びている。まだ雪はないが、白いイノシシになろうとそうでなかろうと、おかまいなしだ。

新しい年は、時は、みなに等しく与えられる。

ひとつひとつ、だいじに生きていく。

（了）

（評）

ローリング・ストーンズの楽曲She's a Rainbow（あの娘は虹）を作品の題にしています。この曲を知らない私は、おそらくSeize a Rainbow（虹をつかめ）の意味だろうと思ったのですが間違いでした。前期高齢者である作品中の「わたし」が若い外国語指導助手に一方的に好意を抱いているらしい様子がいささか滑稽で微笑ましく感じられます。

小説巧者の作品らしく、導入から結末まで器用に作られていて、読者を楽しませてくれます。言葉の使い方は、小説を書こうとするほかの方々の手本になります。

ただ、読後に何か物足らなさを覚えます。読み手の心をつかんで離さない力強さでしょうか。そこを埋める手だてを見つけてください。

佳作

成人式を迎えて

開出今町　沢田初枝

佳作

想ひ出

幸町　北美峰

《総評》

小説部門には三篇のご応募をいただきました。ありがとうございます。

『シーズ・ア・レインボー』は読む者の心を捉える魅力と、文章の巧みさが際だっています。完成度の高い作品です。

ほかの二作はご高齢の方の作品のようで、昔の思い出を心を込めて綴ってくださり、楽しく読ませていただきました。ただ、事実をそのまま書くのは「作文」あるいは「手記」であって、「小説」ではありません。

「小説」はフィクション（虚構・作り事）です。書き手も読者も、それが「作った話」であることを了解している、ということを前提に成り立っている文芸です。

「文芸」とは言葉を使った芸です。音楽や美術や工芸と同様に、作者の腕前を見せる「芸」なのです。余人に真似のできない虚構の巧みさを見せて読者を楽しませてみせる、という意欲・野心を持って取り組んでこそ、小説を書く楽しさを味わうことができます。

あなたが小説を書こうとするとき、あなた自身を主人公や作中の語り手にすると、作文になってしまう危険があります。自分や知人をモデルにしないで、想像力を働かせて、何か特徴（長所や特技のみならず短所や弱点も含めて）のある人物像を造形してみてください。そして、その人がどのような状況・境遇に置かれて、何を考え何を望んでいるか、どんな行動に出るか、それが周囲にどんな波紋を広げるかを緻密に考えます。ここまでのことを紙に書いて、これを小説の設計図とします。

あなたの経験や知見は、話の展開を面白くすることに活かされて、あなたにしか書けない作品が生まれるはずです。

気をつけなければならないのは「書きすぎること」です。説明をしすぎてはいけません。説明ではなく描写することを心がけてください。文章のゼイ肉を削り、読者が想像を働かせながら読めるように仕上げます。

「人物設定」と「状況設定」がうまくできれば、半分成功です。書かれていることに疑念を抱かせない「本当らしさ（リアリティー）」が出せるかどうか、それが残りの半分です。

創作のエネルギーは読書から生まれます。「創作は力仕事、読書は腹ごしらえ」というのが私の口癖です。読むに値する本を選んでたくさんお読みになることをお勧めします。

今年は新型コロナウィルスの感染拡大で多くの方々が苦労し、悲しい思いをされました。みんなが辛い思いをしました。このような辛さも、創作の力に変えることができます。

平穏な世の中に戻って、来年度さらに多くのご応募をいただきますよう、心から願っております。

杉山啓志